

平成23年8月5日

浜田市議会議長 牛尾 博美 様

産業建設委員会行政視察報告書

下記のとおり、視察を行いましたので、その結果を報告いたします。

記

1. 期 間 平成23年6月29日（水）～7月1日（金）
2. 視察先 鹿児島県いちき串木野市・鹿児島県志布志市
3. 参加者 山崎 晃 委員長 ・新田 勝己 副委員長 ・笹田 卓 委員
布施 賢司 委員 ・山田 義喜 委員 ・田村 友行 委員
濱松 三男 委員 ・牛尾 昭 委員 ・高見 庄平 委員

4. 調査の概要

【鹿児島県いちき串木野市】

■市の概要

いちき串木野市は、薩摩半島北西部東シナ海に面した吹上浜北端に位置している。様々な恵みをもたらす海、焼酎やつけあげ、ハム製品、まぐろラーメン、ポンカレーなどの地元産品、名声を博しているポンカン・サワーポメロといった農産物など様々な特色のある資源を有している。

また、南九州西回り自動車道の串木野インター、市来インターと二つのインターを有し、近隣地とのアクセスも向上し、薩摩金山蔵、ちかび展示館などの観光施設、観音ヶ池市民の森、冠岳などの自然、七夕踊、祇園祭、ガウングウン祭り、太郎太郎祭りなどの郷土芸能、串木野浜競馬大会、さのさ祭り、地かえて祭り、ふれあいフェスタなど、いちき串木野は更なる魅力ある街へ発展しようとしている。

■視察日 6月29日（水）14：00～16：00

■場 所 市役所本庁会議室

■視察項目

（1）いちき串木野市食のまちづくり基本計画の概要について

いちき串木野市は、豊かな自然、歴史と文化、地理的特性に生まれ先人の優れた



技術とたゆみない努力により受け継がれてきた「つけあげ」「ちりめん」「まぐろ」「焼酎」「ぼんかん」「サワーポメロ」などの特産品に恵まれるとともに、近年は、「まぐろラーメン」「ポンカレー」「三大カツ」などの特性を活かした新しい食の特産品も誕生している。



これを内外に発信していくために「食のまちづくり条例」を施行し、また、「いちき串木野市食のまちづくり宣言」を市制施行5周年記念式典時に、市、市民、事業者が一緒に行い「食のまちいちき串木野」を市内外にアピールし、今後も、基本計画に沿って施策を進め「食のまちいちき串木野」を確立していくとしている。

視察では、質問項目を10ほど用意していたが、ひとつひとつ丁寧に答えていただいた。食のまちづくり基本計画が平成23年3月に策定されたということだが、走り出したばかりで、効果、実績、評価などはこれからということで、今後の効果、実績、評価等が期待されるところでもあり、その動向等に注視していきたい。

また、「食のまちづくり条例」は、できたばかりの基本条例ということで、どのような経緯で策定されたのかを伺った。

21人の委員から構成される「いちき串木野市食のまちづくり推進協議会」を立ち上げ、パブリックコメントの実施も含め、5回の会議を重ねて、策定されたということだった。

基本計画の具体的な内容は基本理念から始まり、用語の定義、基本方向と目標、計画の期間、具体的な取組・施策、推進体制で構成されており、特に、具体的な取り組み・施策では、産業の振興、福祉及び健康の増進、教育及び伝承、観光及び交流、環境の保全、安全で安心な食のまちづくりの6部で構成されており、その中の内容は緻密に記されていた。浜田市も「食」というアイテムを広げ、観光に活かす取り組みを推進している。



今回、いちき串木野市で学んだことを今後の浜田市における「食」というアイテムを観光のみならず、福祉、健康、教育、伝承、環境、交流、安全・安心にも繋げていけるよう、より一層の推進を行っていきたい。



また、現地にて「まぐろラーメン」をいただいたが、魚の生臭さが全く無く、非常に美味しかった。残念ながら、「ポンカレー」「三大カツ」は食することができなかったが、浜田市も「三大フライ」(ヒラメ、アジ、バトウ)なるものを作っても面白いと感じた。

(2) 総合観光推進事業について

いちき串木野総合観光案内所は、「いちき串木野総合観光案内所～よかところ！よかもん！インフォメーション～」が「物産館 さのさ館」の隣にオープンした。

本案内所は、いちき串木野市の観光スポットを市内、市外に情報発信しながら地域文化、歴史、産業などの地元観光資源を活用した体験型観光を含む観光ルート開発やコースマップ等の作成を行うと同時に、観光ガイドを育成している。

また、いちき串木野の魅力満載の「よかところ！よかもん！よかよか祭り！！」で、験カツぎ御飯「三大カツ」食べて、冠嶽パワースポットを巡るバスツアーを企画し大好評だった。

冠嶽パワースポット巡りについては、いちき串木野市ではなく酒蔵の民間事業者が始めたということだった。市はお手伝い程度ということで観光推進は行政だけでは難しいと感じた。

浜田市も観光地ではないが、民間と行政がしっかりと連携をとることが大切ではないかと感じた。浜田市には島根県立大学があり、大学ともしっかりとスクラムを組むことが必要だ。簡単ではないと思うが、観光地ではないなりに知恵をしぼり、他の地域にはないものを探し出し、売り込んでいく必要がある。さらには、いちき串木野市の観光協会は正月以外休みもなく、浜田市も見習う点が多いにあると感じる。



(3) 合宿誘致促進事業について

いちき串木野市では、スポーツ合宿を行うと補助金も支給されリーズナブルな料金で合宿を行うことができる。補助金額は一人当たり 1000 円で、利用条件として県外から 2 泊以上、延べ宿泊数が 50 泊以上としている。



今年度から浜田市も合宿誘致事業を行っているが、いちき串木野市の現状を伺った。端的に結論から言えば、浜田市の誘致事業よりもハードルが高いと感じた。その理由として、対象が高校・大学の学生であることや宿泊日数が 2 日以上で延べ人数が 50 泊以上であること、しかも補助額が 1 日当たり浜田市が 2000 円のところ、1000 円という事業内容であるためだ。

いちき串木野市の当該事業の実績は、平成 21、22 年度の人数が 332 人、延べ宿泊数 945 泊で、補助金額が 78 万円なのに対し、宿泊代金は約 650 万円あり、御土産代、飲食代等を含めるとさらに経済効果があるものと考えられる。

浜田市もこの誘致事業を有効に活用すれば、地元の経済効果は非常に大きいと考

えるが、この誘致事業も行政だけに頼らず、市民が一体となつての受け入れ態勢が必要ではないかと感じた。

【鹿児島県志布志市】

■市の概要

志布志市は、鹿児島県の東部、宮崎県との県境に位置し、南東部は志布志湾に面しており、新市の中央部から南部にかけてはシラス台地が広がり、全体として志布志湾に向かってゆるやかな勾配になっており、対照的に北部は起伏の多い山陵が広がっている。



また、主要な河川は前川、安楽川、菱田川で志布志湾に注いでいる。

海岸部一帯は、日南海岸国定公園に指定されているとともに、中核国際港湾志布志港の整備が進められている。

■視察日 6月30日（木）15:00～16:30

■場所 市役所本庁会議室

■視察項目

（1）中核国際港湾としての現状と今後の取り組み等について

志布志港は、昭和44年に国の重要港湾の指定を受け、平成8年には九州で唯一の中核国際港湾に位置付けされた。平成9年からは外貿コンテナ貨物等による貨物取扱量の増大に対応するため新若浜地区に新たな多目的国際ターミナルの整備が進められており、太平洋に開かれた地理的優位性とアジア・太平洋地域と日本主要市場とを繋ぐ、中継港としての役割を背景に南九州地域における国際物流拠点港として着実に発展している。

志布志港における外貿コンテナ貨物は、年々増え続けており、平成21年度は7万3千TEU、平成22年度は8万4千TEUであった。

貿易相手国も浜田市とは違い、輸出が中国、韓国、アメリカ、マレーシア、台湾などで輸出がアメリカ、中国、オーストラリア、インド、カナダなどである。

これは、日本海に面した地域と一方は太平洋に面した地域であり、地理的な条件により、大小の格差もあるのではないかと推測される。

主な輸出品としては、産業機械、ゴム製品（タイヤ）、飼肥料（鶏糞灰）、再利用資



材(古紙、プラスチックスクラップ)などであり、主な輸入品としては、とうもろこし、飼肥料(大豆油かす、魚粉)、雑穀、麦、化学薬品、樹脂類(天然ゴム)等である。

私見として、志布志港に天然ゴムが輸入され、タイヤを輸出しているにも関わらず、タイヤ工場は宮崎県にあるということで、少なからずもったいない気がした。道路も広い訳でもなく、運搬にはとても適しているとは言い難い。

浜田港の利用問題は喫緊の課題だが、地域性を活かした何かを考えないと、なかなか利用が促進されないのではと感じた。

(2) 志布志ブランド推進協議会の設立について

志布志市は、志民力による「資源ごみリサイクル率日本一」達成から「循環」をキーとして様々な日本一を目指すこと、そして安全安心、本物、美味しい、志あふれるおもてなしを確立すること、その背景となる健康や子育ての環境を整備すること等、これら志民みんなで取り組むことで志布志市民が地域へ愛着と誇りを持つようになり、地域が活性化し、その結果として市民所得が向上することを目的に志布志ブランド推進協議会を立ち上げた。



仮称「ブランド推進課」設置に向けて、動き出しているが議会で否決され、設置には至っていない。「ブランド」の価値は提供する生産者の側ではなく、受けてである消費者の側にあると考え、名前をつけたり、シールを張ったりすることで「ブランド」ができるのではなく、消費者に良い経験が蓄積されることで初めて「ブランド」が生まれるとの志布志市長の方針のもと設置作業部会が立ち上がったが、議会側からは、抽象すぎて分かりにくい、具体的などのようなものを「ブランド」として推進していくのか、等の意見があり、市長提案が否決されたということだ。

志布志ブランド推進協議会のメンバーは21名で構成され、各種団体(商工会、観光特産品協会、農協、漁業)の長をはじめ、外部の視点から意見を聞くため、流通関係者等のブランドアドバイザーの方々にも参加していただいているようだ。

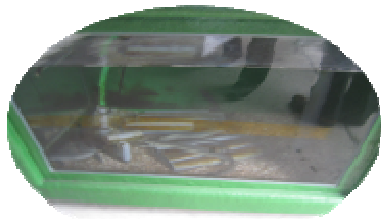
いずれにせよ、立ち上がったばかりでこれからの実績、効果、評価に期待するとともに、その行方を見守りたい。

(3) 「つくり・育てる」水産業の振興について

志布志市は、未来を見据え「獲る」漁業から「つくり・育てる」魚業へと変革を目指している。志布志市の漁業は農業とともに基幹産業であり、中でも、大隅産うなぎは日本有数の生産量を誇り、志布志湾産のハモについても活きが良く新鮮である。その他、タイやエビなど海の恵みが豊富である。一方で、水産資源の減少や魚

価の低迷などにより漁業経営は不安定な状況にある。

また、志布志市の独立行政法人水産総合研究センター志布志栽培漁業センターは鹿児島県東部の志布志湾に面し、黒潮が運ぶ清浄な海水が利用できる恵まれた立地条件にある。周辺の河川ではシラスウナギが採捕されると同時に地下水の豊富な大隅地方はウナギの養殖が盛んで国内屈指の生産地になっている。



また、温暖な鹿児島県海域はカンパチ養殖にも適しており生産量は日本一である。

ウナギ養殖の種苗として用いるシラスウナギは全て、天然個体に依存しているが、豊凶が激しいうえ近年は採捕量の低下が著しいことから、ウナギ養殖業者からは人工種苗生産への強い要望がある。

しかし、近年ようやく実験室レベルでの仔魚飼育が可能になった段階であり、まだ大量生産技術は確立されていない。

本センターでは平成 22 年度には世界で初めてウナギの完全養殖に成功し、天然シラスウナギに頼らない養殖技術の基礎を築きつつある。

志布志の漁業種は小型底曳網漁業、機船船曳網漁業、建網漁業、籠網漁などが行われ、平成 22 年度実績で水揚量は約 185 トン、水揚高は約 1 億 1535 万円強ということだが、年々減少傾向によろだ。浜田市と同じように、志布志においても水揚量の 73%、水揚高の 57%を小型底曳網漁業が主要漁業種である。



ハモについては、小型底曳網漁業で年間 40 トン程度水揚げがあり、高い時には 5000 円/kg の価格で取引されていたものが、輸入等の影響により 100 円/kg まで下落したことから「骨切り機導入」や「漁協直販施設の整備」等の努力により、「志布志湾産骨切りはも」として価格が安定してきた。ある意味、どんちっちブランドのようにブランド化の第一歩だと感じた。



志布志市の内水面養殖漁業は、鰻養殖業が 14 業者、鮎養殖業が 1 業者が 24 の養殖場を経営しており、養殖池の総面積は、256,034 m²、生産量 4,268 t、生産額は 84 億 6,400 万円程度ということで、浜田漁港の年間の水揚高より 20 億円以上も多い。

浜田市にも島根県で唯一の養殖業者がおられるが意見を聞いて、浜田市での可能性を探りたい。

(4) 増養殖研究所 志布志庁舎《現地視察》



この施設を視察させていただいて、ウナギの完全養殖に成功された経緯を聞いた。

生体があまり知られていないウナギの卵を作るところから始まり、一定程度の成長過程にまで達するためには、何十年という長い年月と過酷な労力を要するという事実を再認識させられ、大変貴重且つ有意義な時間を過ごさせていただいたことに感謝申し上げたい。



年々、ウナギの生態が解明されてきており、この技術が低コストで行えることが実現できれば、画期的なことだ。浜田市にはウナギの養殖業者はいないが、今後、低コストでウナギを育てることができれば、浜田市の中山間地域でウナギの養殖も可能ではないかと考える。今後のウナギ養殖の更なる前進を期待したい。



『最後に』

最後に視察に伺うことに当たって、3月11日に東日本大震災が発生し、本当に視察に行くべきかどうか議論した。この時期だからこそ、地方も元気を出せるよう、本当に浜田市にとって喫緊の課題をクリアできる可能性のあるところで勉強させてもらおうということになり、今回は鹿児島県いちき串木野市、志布志市を訪れ非常に有意義な視察をさせていただいた。

今後、浜田市は東日本大震災で財政的影響を受けることが予測され、しっかり地域で一致団結して浜田を守っていかなくてはならないと考える。今回の視察で産業建設委員会の委員が学んできたことを市政に反映できるよう議員活動に邁進していく決意である。

以上

報告者 笹田 卓